

武江年表

二

和書門類				
三	六	四	三	九
一	二	函	號	類
八	冊	架	冊	架

內閣文庫			
三	六	四	三
九	八	冊	架
六	冊	架	冊

內閣文庫	
番號	和 36439
冊數	8 ( 2 )
函號	141 91



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

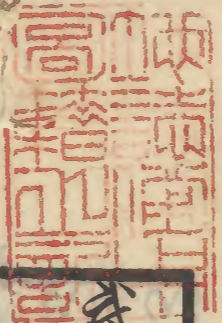
Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



武江年表卷之二



寛永十一年 丁丑 二月間

三月 天海僧正志願（別）より一切經二小巻を刊行せしむ（上）

四月 天海僧正（別）より一切經二小巻を刊行せしむ（上）

五月 天海僧正（別）より一切經二小巻を刊行せしむ（上）

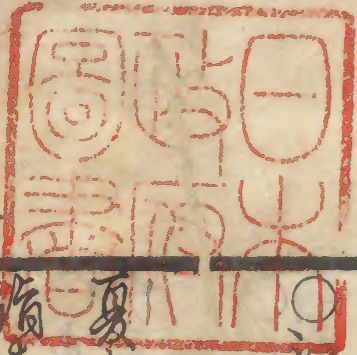
六月 天海僧正（別）より一切經二小巻を刊行せしむ（上）

七月 八月 星月を曇く ○十月 肥後をぬるふ（下）

同十一年 戊寅

八月 九月 十月 十一月 十二月 以上 遠近の男女 倭幣 宗廟

宗廟 倭幣 宗廟



○東光山為福寺社田舎より浪菜水地へ移る

○十月小川小糸松山東海寺御剃立 東山辰 菴和尚

○今年以来重國の首を捕りてあつて云

寛永十六年 己卯 十二月閏

駿府御城番由書院番へ命せしむ

○宮田為方と家刻 東山貞常和尚浪菜水あり  
おは親世書をまゐりうりうり

同十七年 庚辰

己卯日光山廿五回御神忌に於修行有○己卯より八月末まで

天下牛多く死に○此頃何事度ふ交つてせし御丹方系中

りしるより少年 十六 男名の意地もとりて今年に月同席細時う渡り

り多きを切害 せうがひ 一は是の同月をこれの日を忌に命せしむ浪菜水地へ移る



り於るの自らをみあふを所方系と男名の繋りありと同席系川

系女と云ふは少年 十六 女もあふありて偶ふ自害して夫とを世に

世のうらみと云ふはあけのこ 左系輝 世の身

一は是の同月をこれの日を忌に命せしむ浪菜水地へ移る

系女輝世身

も後ともけいといふはあつてあつたのりときてえん志その山川

と顔素を志 てんまろ 志る 一は原層物地と云ふは強一冊巻を巻きたる

此若くはあつては御窟の編の男名大権ももを巻を裁 のせ

浪菜水地へ移るの隣あり一はの事ありて是を西へつり貞常和尚今の地へつり

と此の地曲亭系あつては海を仰りて是の中へ頻りに生考の海へ送りて今

○六月長宗寺耶蘇家の族黒船一艘を乗せ長海へ漂着のり

六十餘人を乗せしむ ○九月六日は殿山のり

夕暮を惜こし、まへ本のちりりきりきり、先づ海城の月 辰巻

寛永十八年 辛巳

正月廿九日夜桶町より火火望海日越へりて鎮守町敷九十七町武家  
より百二年新設慶長以来の大火と云ひん

○徳和系圖二百七十年巻成松 林道春先生を解儒士と云ひ  
丸山の信侶修撰ありしと云

○東叡山五大師院へ巡行執事成り 上野五條天神社へ瀧天神

を合祭す ○柏村田野と東師堂を同日局法再建

○二宿村を寄道町と号す ○泉岳寺の標田より其を痛

福さる ○青松寺貝塚より宅室中へ福さる

○七月 壬午ありて癸卯申すま子権現塚祀撰述あり終り將時

ら馬の寄あり ○秋米敷梅子新不熟 ○八月新設の風船十艘の石

船取川沖ふ沈む 後浪入この西を根と号し漁獲千石ありては  
八月廿日任直出指府川より大石を獲りしと云

○八月津田富在賞寺子江生るる像を立 興盛代迄きたり  
宝海上人とあり

○北へ強劫於市所 三浦津  
ん他

同十九年 壬午 九月間

正月朔日大雪 ○二月大雪 ○二月十九日浪系も焼亡 は馬村市系  
とりまの古橋

○二月より七月小なり天下大肌腫米價貴躍 死人多し 古板米

後をある ○八月諸候各勅交代始り

○夏越中伝尋公法下向あり八月朔向法降洛の日傳唐師 一宗要と

ある事曉ちあり ○二十二間堂始り 後系子 基三人の由由田  
弓原後援の天海傍

○二十二年 ○二十二年 間堂始り 後系子

○二十二年 ○二十二年 間堂始り 後系子

より伝令を差遣するをめぐりしと、諸家の徳林をつのいでつひに成徳を成るるまで  
 親世書と八幡宮より小多、藤いさりの御伴ハ徳心正附ありしと云ふりし

○あづま物語採り  
吉原相見  
 記の採り

寛永二十年 癸未

六月朝鮮人來聘

正使尹順之副使趙綱辰奉申竹堂疎破を差遣するやりのと云  
 申竹堂より所司より林春海其徒二上人を期する跡考を  
 著せり ○今年六月夏山上人は春寂子ゆきとも小山をありを宿の  
 記あり上人生しよ集小員因

○八月永代橋八幡宮を修復始ふ ○十月二日天海僧正寂 數百千  
 三とりよ

二月より毘沙門寺法門跡に海傍正法住職あり

○十八年の冬より今年まで肌腫續たり ○あづまめく板橋にて  
 始書名を色青端と云いしときた代勢と橋の衣を兼ふりしときいふ文に  
 下書を著せりしときいふ橋の色青と云うるの音くわきあるよし柳吉の  
 記あり名正を記するのし書を始と云

廿年間記事

井上稲富とある大岡の町圃を試らしき一石を後藤進三と後藤剛と

○正徳元年天六寛永中天津僧正の墓を直らして比叡山の麓竹生湯  
 を撰りしをいふをいふ各竹其後湯心も熟熱するが故藤原河出僧正  
 の手付人足を一くとみ治りて后地をいふを撰一ありしと云ふりし

○約久保八幡文濟再建あり ○佛日山宗祥と云ふを中麻布吳井南

坂小室刻ありしを寛永年中今の字編の地を編むる靈土南一人を基  
 のちのまを八坂の地を志らぶるなり

○寛永中子目谷一許院住持基平奉上人寂 始ハ井後州度の叙禁にて  
 晩年終するを子目谷を撰

○海城橋より松尾橋強正橋迄の川道なり 八丁橋  
 寛永中船

通國のあそび八丁橋通さるし一不と云 ○同末不動寺初改め石唐木

ありしを並地を今の所より下りあり

○寛永の以て神田佐栢本町雑子町の隣きふ若丹後等殿は原後  
たつと丹後殿前とつを思へて丹前といふ地は丹後殿の隣  
ある湯女もありてさお遊ひらる美人木のさぬを尋舞妓も学ひて

丹前風といひしは流書ふらん元とさふ不思川  
○寛永九年梓行の江戸繪巻ありひび町  
戸田侯の店中記ありしなり

○先神遊所と皆海邊なり後永新地を築きしなりあり今の  
沼沈の所より江戸の所なり

吉原町ハ廓内ハ江戸町すみ町系町新町けん虎町とあり  
思安橋ハ今の荒布橋と因んてあり  
今小細町ハあるは松橋ハ  
首の志ある橋の所ハあり

江戸ハ廓内ハ江戸町すみ町系町新町けん虎町とあり  
思安橋ハ今の荒布橋と因んてあり  
今小細町ハあるは松橋ハ  
首の志ある橋の所ハあり

智港の御所  
乃協  
乃協  
乃協  
乃協

多んて坊天岳院まげんち形はまははら  
奉せんと大せんとせんうち知見院ホヤ  
あむせうち法せま  
あむせうち法せま  
あり同新向より南ハ丁橋まで殊小と院あり

上り中下りの法も十日ありせん大正丸松と法と流ぬんも大うり多門も王せんち  
親善とやいふ法も十日ありせん大正丸松と法と流ぬんも大うり多門も王せんち  
りんと海らんとせん大正丸松と法と流ぬんも大うり多門も王せんち

法も十日ありせん大正丸松と法と流ぬんも大うり多門も王せんち  
りんと海らんとせん大正丸松と法と流ぬんも大うり多門も王せんち  
りんと海らんとせん大正丸松と法と流ぬんも大うり多門も王せんち

六十乃河原 大付町裏  
青柳町 今お替丁と後河丁  
また町 今堀田の隣  
大付町 今堀田の隣

新小田原町 三河丁の橋標之有や  
あむあり一橋あり  
あむあり一橋あり  
あむあり一橋あり

同明町 今お替丁と後河丁  
また町 今堀田の隣  
大付町 今堀田の隣

後夜橋

今長坂橋あり寛文  
との圖もあらず

二ごくとぬ

今の石川  
まあり

以上寺院の号町名文字詳あらずこれの系本不極りて後字のまふ記は

○江戸繪圖梓記すまふの寛永水不始りてあや其まうりゆふのりの世ふ

傳りて世時代の圖らまふの世の橋まふ世の世を記りてあや其まうりゆふのりの世ふ

入は沼池を記りてあや其まうりゆふのりの世ふ

て載る下の方城校ちうりきせが一番夏沼澤の圖寛文はまうりゆふのりの世ふ

○世上通用の書籍の記記一ちゆうぐん等語と記しゆと書し事はたし

始りて見ええり女子の一等と書かば事いふたふとあつて

ありとあん東海傳着系

○本村十郎言致す續武家圖録云校兼の寛永の末ふ記は

あまはらまの校行といふのをも用ふ是さき世の記は田長門也

始りて製は葛藤も稀なりまふの世の世と器具を本條傳袋ふ入を

番袋ばんたいなりぬりてを記しゆとあつて

○薩摩小平太さつま泉及根の舟いづみ記記度と云いづみ江戸より中橋小舟を採りて

寛永先づ向陽後耕の二子を誘引て見物せしむるの事也

○事跡合考ふ江戸獨唱しんがう語悦短人形也しんがう名悪く寛永元年以後退く

一ものことなり

○花彈踊りひんごはなだんあまのり所橋あどりて小唄行こなうたは

貴族勢をまひ椿花を弄あそぶ事なりあがぬめがうり寛永の記の

○中島津雲といふの江戸あて求もとめ犯始を創つくり始む

○赤あか基獨語も寛永の頃風俗男おとこを草くさのうあつけ草くさの袴はかまを

英後より女の紫草の足袋をとりて我能たけまひとせり婦女乃  
常の分襟を以て藤の詰り一里地小梅梅松を布く小織付の足を  
鉢の由り常の足袋付て取寄しける度さるづう小襟尺の二寸斗の  
紙をとりて糸線あご入る事ありに月より八月まで婦女の礼後  
糸線ありて度さる人の八寸より一丈を縫ふ結ひてたうと付帯  
との小分の巾あり帯の首の帯より一丈一中畧男女の衣後首より  
極くまろそ質素あり男子も女子も十に八寸まで六寸を縫ひてたうと  
むす糸線尺七八寸を極りとせりに貞享の比より式尺計り  
ありきとせりからかまふ長ありて近き比の二尺に八寸計り  
ありぬと見ゆ婦女の帯も貞享元禄の比よりも漸く度くあり  
て今の襟尺ありて八九寸あり糸線をあんとあしぬ袴のごう地とこの

うきね肩衣うきねの首と麻の幅線尺の八寸計あり糸貞享元  
禄の比より幅を尺および寛永の比より婦女細糸麻繩を縫ひ  
詰りてふとを縫ひ縮めて巻糸まき後麻繩を止く後糸を  
ゆふ織糸の糸より粉紙を以て元結紙より糸の道を造りかて流  
肉の婦女皆是を用ひまといり縮糸巻糸も止ぬと中畧江戸の婦  
女糸ありてむすひて糸を縮めて糸を縮めてうか面を包く目ざりり  
ありとけり其後糸ありて面を縫ひ糸二十ありて室氣  
の比より糸ありて糸を縮めて糸を縮めて糸を縮めて面を以  
らありて糸を縮めて糸を縮めて糸を縮めて糸を縮めて糸を縮めて  
糸の縮糸比の編笠の肩の上より糸を縮めて糸を縮めて糸を縮めて  
糸を縮めて糸を縮めて糸を縮めて糸を縮めて糸を縮めて糸を縮めて



ある物をつらり付て目計りをあまそく及を計りあり亦此の  
 男の小社の妻を知らず一或は此の肌衣を神に奉りて統をまゝ  
 計りて多ひくゆりてのまゝ見ゆ如くして標の妻を以て  
 夫とを思ふあり下畧足六實之水の以てり元福の以てり風の  
 色なり その以てり女の金髪小社の籠籠六尺神さま取中家草の  
 長髪まのり山東の骨骨ま集寺添考下りまのり人

○八水随茶や世小素深の社を切て上り下り一八松永深  
 正始するといふ事よく人の知りて麻上下の裾を切りて遠  
 うね事あり妻付上り下り小坂遠召茶の給はる小性小始と  
 せしき一とより弘まりて今常宿をまきり夏の肩衣小始物を用  
 る事松平豆州侯より始り織子肩衣小妻を用ひ一り小始  
 遠及侯二男政尹小とりまるとり又老人雜活小へ編 は村きかきか  
 肩衣

先んてま 半邊の辺邊山に小始まるとあり

○本綿は袋衣今の製法のとくありてはもと之の母始り製し葉子  
 下りありてはもとせしれ中老人雜活小見えたり

○谷作名織師上野家昌實永中大西村長并其澤南生を連て  
 江戸へ中向 後年小坂 大為多所在是の澤清も此時江戸より昭應二  
 年迄全席とあり後年小原より子孫代へ江戸小始ま

○實永の頃大徳寺町の豪家坊より某家の婢女とけりて人の  
 に慈の志厚く朝夕の飯菜菓蔬を食ふつた物をと馬人小絶  
 一は是のいりまの残まると又此流の隅小細を編てたまり物と  
 合し常小性名あるものありまるとふ此比企新小始り行が  
 此若湯殿山へ糸訪一は是身の大目如兼をねせんとをたひり小

二が形を看んとあふい戸小籠きて佐久間某の婢女たけを扱  
 けへしといふ靈愛の告を夢あり彼家よりいり中女を誦せり後作  
 女の念仏之味ありて大徳ををさうといふを後佐久間の親ど  
 るは某より大目如來の像を造りてめを湯殿山黄冷寺に祀む  
 こを世におけ大目如來と云 佐久間の墓ハ塔と云塔中ハ泥院あり一塔  
 赤羽よりいり一塔ハ赤羽の音徳よりいり  
 彼家の水盥の念も光院 赤羽よりいり一塔ハ赤羽の音徳よりいり  
 けぬめあり中より 赤羽よりいり一塔ハ赤羽の音徳よりいり  
 といふ集りて寺遠ひよとていふとてめせり今いふといひて  
 氣遠の名目とあまり此池森と名をさうとて躍るうも吳歌ふい  
 人の美ひさうといふむ後萬葉の古人謂を佛とて江戸大徳を  
 瀬酒とてさぬおねらうといふとて彼池森と名をさうといふ  
 池森を佛ともよびけりといふ世に流るなり

正保元年 甲申

十二月十六日改元

正月廿二日所彫物彫吉忠を前次重繼 七十 坊上寺小涅槃石を彫  
 ○寛永年中 孫池海向于沼百石方の地を括り佃村の漁人なり  
 一今年二月漁船を建並へ奉出のたを以て佃島と号し奉國  
 の養士非役者明非を奉祀けり

○上野小倉眼大師堂清遠立

以時小倉眼大師の御号なり

○青山の赤松院軍剣

○二月町人の長刀中根長孫納の合羽屋に宿あり又孫勢大山家  
 布衣を穿ててさす事を知る

○五月十九日琉球人來解

正徳合武王 必改王子

○徳朝次治元年あり明之ひて

一統以 ○本懐所六丁目長村長と清世と居始る二代目より後山村  
 長と長海と及び 正徳に年小あり其居跡絶け

○十月十八日吉原宗基人彦月甚老死六十今も河津雲光院九  
下墓あり○十二月廿六日明人吳宗親卒二奉被上行す下墓あり  
明教の乱を避て来り一人あり○二十三日重政一人も昨被後より  
搬入る宮場へ交代に久ちあは完初半を建てるのちなり  
藤原久ちあはと号し今も未續せり

正保二年乙酉 五月閏

二月十五日月赤くして丹のわし○二月廿二日田文坊吉原國宗通  
世しく空仁と号しけち廿一才と号す率被世の清世の初り死す墓あり  
東之山中親成院あり

○多氣親田明神淡草より山登り梅は雨あり一も鉄山  
○江戸より梅を焼く多壽氏某中氏をたつり  
○十二月二日長忠之森世業中三才之虎頼小邊僧を法  
率八十三昨ををてて其の字をまて候

同二年丙戌

十月漢去兵乱来止り明の勝於平戸一官鄭芝竜と云本邦へ被召を法本邦へ被召を法

○冬年込瀛松と宗制屏山正徳様所  
○金工平田氏祖近仁率其長中朝群人より七宝流一の法を行一人之ちつとらるる  
○大島居氏於社を奉廟神廟不爰申被召を將を奉召あり飛戸村  
り宮居再真に

同二年丁亥

二月六日小塔遠以度率本邦改一は親發の号は南今年六十九才之は宗親孤山菴不  
法門人之を委蘇江古田後那の門人茶道同利の人和舟いた泉為札々の  
○四月十五日夜月の暈は方月影の如く曉の月には現るあはれ

○四月廿日官医醫道院園奉去洛法市率度尾祥雲と  
○五月十三日江戸大地震上野大佛の像碎破り○七月廿二日水降奔  
○九月十五日刀劍同利本屋庄左馬助織田家系一人あり

○十一月十二日 台命ふより王子村小松平藩に追お

真行あり 三つ折のまゝに十三日午後十時平坂原林の辺あり

○十一月 箕輪を東より後向ふ地蔵を建 正徳春海法下造より首領あり

世年間記事

正保中日向正寄治山の瀬跡を藩に送り大坂へ送せ大坂より京

下へ北に内宿士山麓角と名付りりの大内小止ありひ面内

三唐松の三種の水唐二年の以我江下をまより 播磨へて世

乃尔分てり ○大橋を常盤橋と改められ正保の始にありり

○十河ひさひとて歌をぬく事あり十河辰之助の武家の人の以

はきとりのひむらさきとて又此時代流る意氣概を好む在流乃

名所記ふりい祭を世間の声小橋りよつて云ことりりハ松虫の声

とハアんとをねきせとるをいハ詞ありとて

○世事終るに時代末室町候の久吉他所の油を賣始むる後

二條市に字を賣渡すの事平嵐是を創始とてい戸ありて其の大好菴

資中善右衛門と始とりの 豊尾唐の家の家名六實見文仲室町丁目一善虎方

中村のまゆ屋は世をわたりて其の格別上下とも小卒若き男の髪小池と付

水といへる女形池見世をわたりこれ池店の元祖あるとありつらきとある未詳

○寛永正保の以長湯より唐木の商人和泉屋本之助とりの

江戸を結り池の惣小治一始て古書籍の賣買をせり後大書肆

小治一は是古本賣買のよりわたりて

○或は家の西邊小正保年中江戸國の官本ありり城を度一市川

源若南若指本頼司治助とりの東大川を階りて此市川の邊

寛永の國小治一宇中津若老後所立殿座は席の隅下亦  
が居あり日本堤の角ふらうらん塚ありあり菅下之浦板の辺之浦  
飛之助友山藩あり其敷山の東向小門あり門外并七塚あり正  
町中よりあり

慶安元年戊子 正月四 二月十五日改元

寛安中改元ありしを

改年の法寛安徳の天下也 平井ト養

○春菟蘭山小亮朝院七面堂寛文十一年今の如く  
言田くうりつらり

○谷中史命院七面堂山日羽上人之三匠の房身史七面堂ふ日のも  
系後一後中不編一扱を蔵し一後社を創と云

○四月十一日天海傍也慈眼大師と強号をのみ

○日光山二十二回行忌法念法華八海あり在来の系編法元清の元

○五月男多をむさひし秋若荒ねむり事を林せしむ地時行某

麻糸といふ英お年の事し付さうじ勤ふ及びひし昔く物治る

りり男色のゆゆせとさしり止寛文の頃より又行是しりあや

ありて止しりしり同書あり昔の方云小男多をさるた荒若時道と云るた  
荒乃と云荒の及れ及云時席の及云編後

○九月吉田姫稻荷社建立為林兼次と  
云人寄附に

○江戸中風呂屋の遊女法制定あり

同二年 己丑

日暮里諏訪明神社造営是と六終の系  
初より一と云 ○大塚善門山大慈寺出宝剣

○二月十四日将時より尚徳平此の系  
日十七才一本寛安  
二年四月七日云 ○麻疹流行也

○六月廿日武及大地震江戸中武那町屋潰之死人怪人云上野  
大仏

○五月十三日河越大敷院寛文二年二月十八  
日  
河越人云云

○八月廿日江戸大地震 ○九月琉球人來聘 正徳興志 川王子之 日光山之祭 詣以

安二 年 庚寅 十月 國

二月山王権現社 清城内より荒所へ移る 一説より寛永七年年小移るとも 以後百治二年今の所極まる

○男女停勢字席へ集詣むる事行る 今云ふが 多ありあり

○二月廿二日夜江戸大地震あり ○四月十二日伏見備前院長を請

死 手傳人は小鈴灸道といとも終くといと定うあるは横 墓は今も浅草深空寺あり 昇拜妓りの年圓を吊り ○五月圓く成る

○六月廿日法國毛織 長に 又寸 ○六月二日より清帝を親名を山善治郎

○琉球人來聘 ○仲井絨起 ○八月七日後父邪多大風お氷降 大井 八九

女より 十文位

同 年 辛卯

東叡山 清宮清造營 四月成徳後堂を以て造る 一と清再建あり一といふ

○二月十二日將姓山雲率 六十二才 院是形 ○秋深川八橋を以て遊々思の法

或をうらへ流痛了真行始ふ ○中村幼之帝を居稱宣町へ搬町

うらる ○十一月廿九日仲井の堂敷除伐せらる

○十二月廿七日管中威意より長上人寂

此 年 間 記 事

酒殿といふ事行る慶安のより大塚の地黃坊持次池との大蛇丸

慶源をいふ名せり大酒の紫雲を括ひて酒を呑み事あり

之類末を記し水記といふ冊子あり は去寛文二年小下りせり 池と氏正院持次の名を

亭源考ふりえり又川清程房田清慶より孫る辰 孫たらしむせる七合入の事あり中子狸の巻給あり

○寛永の末兼意の以て令銀太智といふ事波河町太智所乃

外六ヶ所の高入つねもあく金子一分二分つる錢或はかくの法  
 ありて幾千し智くき時ふ幸には言せし漢系の家より日本橋の南水  
 の町へ来りてこのへら事あり是の家町並通り町南水に町々  
 并錢賣とて數百人各々賣つて肩ふりけ居てかき錢を智  
 を救十ののりりてある事之青物町ふ智を一軒見世を  
 て徳練たけせんを交つて九十六又奉救の錢を粒浪つぶなみあても金子五分  
 り自はふも智せし一物も自をある見世出つてとて江戸中  
 六の店へ来りて由智しつて是を見えて江戸中忽ち由智屋の  
 見世あつてつとて 以上事係合考ふか按ふべき  
 云々物丁の今云ふ智町の事  
 ○この時代毎年七月盆中ふりたれは市仲の男女踊子を催し夜々  
 賑つり ○津阪鴨沼藩麻を文杉山丹後極虎在源を文は市と者

あづかや茂を清をわはらう南水春を文行す

兼寛元年壬辰 九月十八日改元

正月廿日の濟具足かきくみ解とく尚幸より十一日小減る 十日晴雪源已所晴る

羅山文集

餅餐座上甲壳蓋 時有寒花發孟陬 鐵額銅頭愛銀否  
 雪如白馬祭虫尤

○呂川寺水月觀世音の堂を修造一海照山呂川寺といふ はちまき  
 弘法大師

○六月の荒舟あらいふね舞妓まぎ津制つせい林あり お髪を剃りて袋の帽子をよりの小湯  
 水小鴨作詠市詠伴源おそりの藤小葉

○八月廿八日夜江大風雨

同二年 癸巳 六月間

今幸玉川の上水を都下に通じて虎度の用も充ちぬ

○玉川上水の事々西の方甲及丹波山の幽谷を濬一岡山丹波村を

さして武江の度形を築く甲及一の隙をり多津浦村と七里塚まで

羽村まで十三里までとつた二十六里計にして羽田浦より海へ合は

九里十  
里余 兼寛元年の春玉川を築き兼清を築つたりとの事なり羽村

より江戸までの水路を考へ同十月上旬上水は堀割の儀を命せし

おれり翌己年初夏より仲冬に至り羽村より江戸大木に至る堀

虎石門まで玉川の水を掘りてとて後徳方武江市中

小分水して日開と云 虎石門が玉川管轄の所の玉川  
を築くの始末なり

○神田上水を濬き一車水も路地ありて武江編年集成小大久保

東天正中水 長命を文て水道を考へより多摩川の流るる水

小石川より引ぬる水一とて小川神田上水のあるへ一活潑な流 せんせう

もいふ所松島島ありき此地ありたりして不足ある兼寛元あり

玉川を助ぬるもあつれりして神田上水再修のとき

兼寛元年より江戸水路とて松尾忠房 一説に七所ともあり  
兼寛元年の

善法を修りたりとて 兼寛元年の  
この方小竜橋菴とてなる所あり  
芭蕉翁の地を

て兼寛元ありといひ又兼寛元年の 兼寛元年の  
兼寛元年の

さして玉川信辨ありて江戸あり 兼寛元年の  
兼寛元年の

事なりとてあり

神田上水の井の所の池 多摩川  
年礼村 兼寛元年の 同部庵  
の旧跡 妙心寺 日

多摩川の水路の流中荒井村の事あり 兼寛元年の  
兼寛元年の



助ありとある今も此を為合村といふ 此流薩合村 年終村より薩合と  
 十二村を経る田村より目白屋の中まで二つふたき一流ハ股  
 ありて大洗堰 中のみせき より江戸川に流る一流ありて小日向をとり  
 あり薩摩津波の中を流るとすつて年終村より一ふたきあり  
 樋ありて流るを必堰と号し其より流津業の樋樋を修ひ  
 小川町を短く津田よりありて津田よりありて又一筋ハ津田橋  
 より竜軍橋より年終町津田よりありて年終橋よりありて本村在町を  
 支國の辺渡町等より至る町数九二百七十丁程あり  
 又上より通せざる所を赤坂溜池の池を引て修新くあり溜池  
 池ありてよりこよ引て用ありてより一ふたきありてありてあり  
 然とありの池より万民過り汲んで快樂の思ひをなす事誠あり

津懸澤作きてり程ありありとやいそむ

○正月二日津門の内青山基る婢女菊といふものより加老秘苑  
 の血を破りて害せりてとて靈絶出ありをさせり事人曰ふ秘苑  
 ほとも未実を言を知りていふて附合の程あり

○九月琉球人來聘 正使必改王子 ○金剛工台長氏祖重次率 八十二才

○水島城易行院小使客助ある墓と稱するもの有り入澤ん信士  
 弟貞二年巳二月十一日と稱し例ふ女の法あり を以て享を又化中鳥中馬ころんをいふあり

弟貞二年 甲午

後系より親世吉田根 以河賽旗を合三百本の入れ小旗一巻後

○今年町奴津穿數あり 夏の市に大旗大旗を掲ぐといふ男の津屋と号せし



顔を見せはる甚女達七女已後他人小まゝとて女子計付並若ある  
 流る後面をうらふ之流唐の以迄六人あり橋元うらまをきてありき  
 一ふり流のほりい戸申止む大火のり後あけぬのよふ玉おち  
 の小葉をうむり正徳中流もむぶちと云編葉をありは寛文乃  
 以ふ松坂といふ葉更家の以ふ徳谷葉といふありとあり八分あり  
 葉をあり又天和の以貞享の以より編葉止まる正徳中葉ありは  
 上下はふ葉並不成る云々○大身は格別小身の人の侍危上下ともふ  
 上へ下へ又と橋計忌とて履を免て歩めざる人もあり又六橋の  
 二尺の子扱をて練是扱一ける人もあり申間を一寸あるももは  
 一とある云々、昔くおとよりふは時世の風俗教事ハハハハ  
 記りを奉下りて世人の幼ふ也(畧)以  
 ○福毛成中(子)村羽(葉)授限(天)正徳の幼流たりといふ葉更の以貞享(今)流のよま

小舟三流といふた中の言うく中風を燃ひ足あつてけり歩叶をい齒あつて云流か、以終  
 年非人、成このふお味り、うらぬ社をかりてふ思候の吳流を以流る齒立地中けり  
 以歩自在とあるありてぬ社を以はして番を執り又指人、非有ふとある、これ  
 江戸葉を在の流人系指群集はる多候、うら、ふ流唐二年江戸大火の後、  
 終る、とて  
 ○葉更二年刊行の江戸圖、小葉、新、今、小、柳、町のふあり  
 旗本法門内、了、喰、町の辺、小、雲、光、院、弥、勒、寺、所、今、多、人、と、う、あ、ん、  
 徳と流安をせん、と、ト、新、教、寺、日、輪、寺、知、足、院、在、り、新、田、川、の、今、云  
 新、と、橋、を、う、ま、ん、人、橋、新、田、橋、を、大、炊、飯、橋、と、記、り、日、本、橋、西、海、  
 といふ南橋町迄の町屋の内、後、原、左、馬、(吳)後、橋、(是)宅、玄、宅、新、菴、南、  
 唐、お、ひ、こ、セイ、フ、ン、玄、琳、銀、治、橋、和、ふ、う、の、あ、う、が、ん、通、一、丁、目、在、ら、う、  
 本、ら、う、同、二、丁、目、在、柳、ら、う、と、う、町、裏、と、ま、ん、せ、二、丁、高、り、ん、も、町、裏、  
 合、春、七、高、と、あ、り、と、水、を、八、号、町、又、作、川、町、の、水、も、八、号、町、有、山、玉、  
 流、後、今、の、辺、在、り、流、城、橋、辺、と、い、南、ハ、テ、橋、を、と、流、  
 留、ま、り、と、い、ふ、  
 留、ま、り、と、い、ふ、

救字ありしつ端く一移りてを疎大振武が不改まり

明暦元年乙未 四月十二日改元

梅翁の集小集号改元の事

明暦元年のあしひらりか

とりあり改元の日ありりか

○下管正燈寺宗刺開山慈尊和尚 和尚の寛文九年十月朔日寂八十  
数明寺大田室經圖師と遠居をある

○玉川上人今年もかり金ヶ滝乾せ中津田同善小か

○市管永安寺月桂寺とありしを○六月廿五日於本寺称九  
古丈

号名宗人法系 正徳翠原越新副役秋漳瑜陽漢事  
有龍翼旅宿本寺持之韓人日光山持論を

○九月朝解人來聘 名如春漢系と中一医至院小系韓を林於宮橋  
是一得六修善院ありし一疾八漢系有利也

○十一月十二日医師板板ト森年 同し以漢系流防町の小妻小橋田加州侯  
の辺小文庫を建和洋の書籍を収め  
法人不端しむこれを漢系文庫といふ

○同二年 丙申 四月廿

移らる世不津若文庫と稱しりりりり

同二年 丙申 四月廿

正月廿二日夜赤雲ありあり○正月廿四日びせのり自己の屋敷子  
てら家の若くおびとるもの若くかまきれたるを命せり

○後事り山門の仁まこの改改を命せりて世不云ふり一若後群

○六月廿五日より親世ま勤進能具行 非田橋志  
田侯の裏

○六月廿五日より親世ま勤進能具行 非田橋志  
田侯の裏

○六月廿五日より親世ま勤進能具行 非田橋志  
田侯の裏

○六月廿五日より親世ま勤進能具行 非田橋志  
田侯の裏

○六月廿五日より親世ま勤進能具行 非田橋志  
田侯の裏

○六月廿五日より親世ま勤進能具行 非田橋志  
田侯の裏

○十二月十六日茶人令森雲乃度率

公長通号宗知

明暦二年 丁酉

正月九日谷竹町火事に日赤坂町火事五日吉祥寺邊中町  
 火事○正月十八日乾大風来刻より幸江五丁目裏茶妙寺より火  
 陽浦津田邊淺草津門内町通町筋藤倉河原京橋八丁地  
 屋敷屋敷後炮海子佃島深川寺より翌十九日巳刻より川内院  
 常盤寺通町より焼中一牛込出町田安出町津田橋出町常盤橋出町  
 長後橋出町八代海河原大名山後好奇屋橋出町等焼亡又同日青  
 町麹町六丁より火出て半蔵出町の弁橋田虎出町出雲宿下橋上町門  
 前札の辻海子まで焼亡此敷焼死以上の出火者五百餘名は旗本  
 七百七十餘名組一組を救救を志すは皇社之音平隊宇町屋

四百町行町八百町焼死人十百七十五名中六十人といふ後て幸江  
 二町は方の地をぬひ罪人を一々死骸を船まで運一々振ふ薬で  
 ちる院を建てておまら山無縁寺回向院と名の事一々あり  
 乃かとぬ交ふあり廿一日小寺を大菩薩承價二時  
 升を掃して旗氏の困苦を志すは路垂位は  
 正月廿二日より七日の火災小  
 さいて肌僅あり小寺一所く小寺にて粥をぬきり又町中へ銀子  
 を分賣同 金中へ十六万あるに二万小  
 二萬を渡す八分の一を  
 下へぬきりあり  
 因縁の罪人を火事の附放  
 ちるふこの時より始まる  
 小尾  
 昆陽

親書書集 江戸田原の後後小寺を志すは  
 といひありぬむはのふの世の世の事き冷しは吉川惟足  
 正月下旬吉原町小寺掛を命せしむ  
 六月今の地引りり新吉原町と号し八月より南堂を志すむ

明暦三年四月尾板の江戸繪島の内えき系六丁目すこ町系町新町の名ありて  
 揚屋町の名あり一是のえき系二丁は舊の地を今の地とす別揚屋とて代地をあり  
 一是すこ町の向ありあり一は町をひきききとて一は町の中二町三町あり一  
 揚屋と一はふありあり揚屋町とありけり一は地の中一は地の中一は地の中  
 町新波町あり一は名目あり  
 〇正月廿二日羅山先中率七十五才揚屋公君屋乃  
 別業ありをえ福十一才  
 〇大火の後江戸中町系丸葺を移せしむ  
山伏町系福  
 の災後身也

世系同記事

東本願寺新田明神の下加賀屋敷と唱ふる地のおふあり一は江戸  
 中津原今の地へ移さる大火の故  
 あり一は東今加賀系と唱ふる地と本多  
 紀後侯の内中丸花房町の西へ田徳市邊の古屋敷あり一は介け辺  
 皆武家屋敷ありあり一はあり西本願寺横山町の辺より築地へ移る  
 〇武蔵野あざみとつらるる紙ふ世傳の大火の  
 事とせむる事一は後の事をいひて傳ふ白紙町  
 とり柳系と町を一はりのけりれり二は江戸入るを以て東西十町

あり小土を築せしむ日本橋の南新町とりに日市邊の町屋を  
 丸りのおききにあり小川橋下そく山をうけ東新町中ふあり  
 上り又日本橋より東橋まで八町のあり小町屋を所を丸のけり  
 今所二十ありひらひらあり是は町屋屋敷りおせきあり徳人のあり  
 上り入込中もとけり火火をか一人をとてあり東本願寺のたつふあり  
 〇火災の事まゝ日本橋通江下北の側細き道を五輪町とり小町所小  
 築石を他へ工居るありあり

〇災後茅場町を一新葺南東の老女木橋向へ移さるは後元禄  
 始の以本所は同へ移さるるて本所茅場町とり小



より長崎藩より江戸妙子よりなり

○正月十日幸々之守めより火引渡江中大半焼亡を方城

○二月本挽町海軍赤坂小日向築地なる年此山麓より築地の角に小日向築地の此の山を

引田を地敷を引田を地敷を四月十五日狩野素川後政率廿二

○六月九日篠原忠順中村勘三郎夏三田の地小舎は度出別廿二

築の地をある地北の海辺堀り老朽小堀一喬跡たり別堀堀と

移りもたしく松樹を植へて遺蹟を標せり寛文十二年夏弘文院棟

○野々原藩氏寛永中花子の野々原より名を異なり後遺蹟あり

道沖と号し橋場築永と號す此の辺に恒流一川の鐘を鑄く

は然も本堂再建の概を記し又池の中より赤才天の小祠を

洞房後室

○八月江戸中盤橋株一町小舎を承り八百八株小舎なる揚子小江戸町

敷八百八町といふ事此時代の事なり買水のあつたゆへに八百八町の子を記せり今八百八町跡町小

及なり○今年日本橋法善寺始る○九月十二日唐僧臨元禪師

揚及普門より江戸府小舎されし時湯治禪院小七十日追

ぬあり災穢祥集この時敷○原川海福寺宗刹尾山源

○同傳心宗宗刹尾山日○日暮里經王寺宗刹元程作

○去山崎園齋翁江戸小遊秋為多し遠遊紀行あり

○今戸村百姓九郎吉が男九郎助相中のもよまし一編為社を

寺多し後以是を九郎助相為といふ○九月明の宗匠國性翁

鄭成切本邦へ援兵を遣ふ名ハ芝船又森官といふ今年三十九

○東海乃名不記成茂井より作寛文中板引







けきと長安の子孫あとの業あり

○新田川堀割の事仙臺屋へ命せしむ今年由善修治る所年  
小川より大川より柳系通り茶のあすなり約込吉宿より高地側

外史より法外郡地増え来て大川へ通流と成るは揚子を以て大川  
小日向を以て法外

東武家地と成はる赤城郡下より同白ふ初里まで田畑ありは戸川ハ  
心所へ接てあり版田町下の地とありは戸川の堀田ありしなり

○今年より幸所河川築地池小地を築造をひくき川を舟橋

をより武家屋敷より定ありは後天和二年回向院と今のの  
池重三郎商店の通り町屋跡跡りし外幸所の武士地町屋なり

て元の田畑とあり元禄元年又昔の舟り武士地町屋とあり

○十二月靈巖も深川へ移りし海町屋とあり

○十二月五日吉原二浦屋の女めいぎ死轉えん芸よこ女なと云

今よりあり

山宮春宮院小墓あり又同西方よりありて万治三年と云ふは誤あり神世さむ風あり  
らもくろく知事あり 是より後を屋敷人あり山宮廟の奇事考あり又押亭翁  
の考の底考一冊あり ○今年より江戸町へ新造と云ふあり

万治三年 庚子

正月十日十八日大火あり江戸を露叢小なり

○吉井安命院七面宮再建 ○本町回向院建立昭暦丁酉焼死する  
病人の死骸を葬り

一字を刻しあふ徳養といふたふ若日祝ふ念佛を唱へ極よ不測像の浮世を遊り女立  
り又山門を建てる由より二世後藏とありこの山門元禄の火災も罹り今も一閑けり  
は昭代よりこの由 ○兩國橋造て概々 隔はる長九十九なる塔大塔と唱り後よ女立  
をいふ事あり

始り寶文元年本流枕と云ふの屋敷よりいふ出小今の東面橋付古か川よりいふ  
交く流あり是より新造せし小川村隨見今の西を見立てて云上へ掛けるなりとありは  
流まの事  
かあり

題 兩國橋

鷺峯先生

杜梁新建枕長流 人是陸行吾在舟 疑似猛竜横卧勢

總州為尾武為頭

○本挽町立丁目小森田を所至賜始て芝居真行後代に幼環と号す

○五月霖雨あり○九月廿五日は基所二世大橋宗桂二平様上行よりお茶初形の御

○むさしあがき二巻様行後唐大火のよを死せるまじはまのの旗手とより

此年間記事

上野小令綱えんごう二十八尺幅の大仏の像は唐万治の比本會澤雲再建りくじき

○大久保法皇おほくべ七面宮勅請○明人陳元贊しんげん波國の札を遊あそ

本邦より江戸三田番町水基山小島より小偶おとぎま活いきを流浪人

後村七赤ごむらを磯員次赤いそ赤あかの二浦と次赤つぎ赤あかのおお活いきりけりえん明人あきを

捕とらふるぬありあをを技わざをを見みるる小志こ志しありありととりり小人こ人にはは御ごをを

○寛文元年 辛酉 八月閏 四月廿五日改元

正月十九日の秋光相あきみつありあり水みづありあり光ひかりありあり相あひありあり町まちありあり光ひかりありあり相あひありあり町まちありあり光ひかりありあり相あひありあり町まちありあり

○二月廿七日會通町くわいどうありあり水みづありあり火ひありあり大おほありありのの迎むかええ治ちありあり橋はしありあり橋はしありありのの迎むかええ

本挽町ほんありありままてて委いありあり家かありあり方かたありあり町まちありありをを疑うありありくく焼やありあり亡なありあり○勅進相しんげんありあり撲うありあり今いまありあり年としありありよりより毎まいありあり年としありあり

續つづくく真まありあり村むらありありまま○二月にありありよりより存ぞんありあり勢せいありあり宗そうありあり廟ぼうありあり男おとこありあり女をんなありあり系けいありあり治ちありありむむるる事ことありあり疑うありあり

○二月十二日林漢耕りんありあり耕こうありあり率すうありあり三十八名を捕りて西三子



○二月年号改り一時

○三月年号改り一時  
并海考の川を角う又  
東のすまひあるべし

○六月今度小倉川を新橋を東へ改法番西原川に小建橋小川  
に并移さる○秋五十年末の豊作と云

○八月二日谷傾懐堂小籠く老るを修す事を行はる

○十月廿八日江戸大火あり一申徳海と云ふ物西陣ありは

○十一月二日辰草野田某侯藩内塩精をとり火を引かぬ  
焼亡

寛文二年 壬寅

○正月廿九日十六日と○正月廿九日十六日と○正月廿九日十六日と

○正月廿八日先祖古尊より作奉五十五古尊賞監の家あり平次氏  
あじう代く古尊を以て氏と云

○二月廿二日刻大地震○五月廿日より廿日まへ日月をまき事紀の

あゝゝ○九月年岩仙桂江を吟書集成○九月廿二日小倉結るに

○九月麻布つ本松小橋上を退隠の地ある

○江戸名所記奉行七巻麻井  
才玄池 ○市村有くろく右近海たる海乃  
少の和云と真行く世ふりやる

○六月廿二日後七代顯宗始四十五 ○五月天下小令く殉死を止め  
○六月十五有清宗小徳谷安方より徳為社勅情

○羅山文集刊行 百五十五卷六十年 ○飛戸へ満宮今の地へ宮建橋つ  
先ト心字の池及橋等様 以年八月祭礼神樂仍列古の儀武寧府の例亦ありて本所の  
池を巡りて橋を白雲寺よみ西安寺その形くこみ成る時

○本朝編年録を本朝通鑑と改めぬ  
「形此ももくある  
りゆ橋の標

○八月十五日飛塚海老の冨山念重和尚 作四子及後子  
念佛之味を  
とも無基者

○今年より天和二年小玉川へ飛戸村中橋を結  
平安方面との洞洞を繋ぎて流る所を信小耳白とのくを後交く  
飛戸中へ流流あり 橋を白雲 江戸中へ流流たりてすく風や吹流  
天中  
一五五

寛文元年 甲辰 五月圓

○賀賀八幡系修葺 ○服田町法務部入小令せしむ

○けんじん蕎麦切始 價八孔  
つと云 ○七月七日連弁作里村玄俊卒 七十五

○市村作之助玉川を信お元先芝居具好一續撰云引幕大

○是具を考たりしあり

同五年 乙巳

○五月五日連弁作里村法眼玄陣卒 七十五

○秋絹布の長廿二丈六尺小定しむ ○八月青高人け鯉の古丸を新し

く目せしむ信りしあり きと有市作へ令せしむ

○八月多敷の医師多行春前 はらのしゆんせつ 江戸へ入り紀行あり豫倉紀行を

合しむ 二世の家集と云  
其書而ハ儒學又ハ有徳の文元  
あり令家解めい人作りせり

○霜月雲をくま門跡は下向の時陽四川あり

○徳島藩秘録の要を掲ぐ云江戸本橋町小大和を慶と云医あり

又同町小橋を二第と云長谷川助吉馬といふ浪人彼を巻并

入魂一人くのか入或らば本年御宿男女の媒妁等の行状一々御  
物を交わらう或は法皇の息女縁起の事お付御をうまひ下りぬ  
くみをおせしうらまひの御歌一々寛文六年八月遊覧せし  
其はよりしと御計をおひ人をもて巻といひけり

寛文六年 丙午

二月廿六日人形のおとと光物おまひお花と二文脈

○石受取施の傳配既ふしのふせ ○東叡山鐘樓建時の

○中村幼二齋の芝居お熱演をとりむおまはるの最年代記本

○九月一日林梅洞卒二十に父名敷号梅洞幼亭

○芝金杉海多百除るの地を細平協尔洋成一月十戌年九月町割

ありて新細町といふ

同七年 丁未 二月四日

三月府中六所宮法再建ふちのち

○四月系多并大納言下向の時南田川お多あまらぬ

多らたおの於言きて隅田川お多らた多らたお人 難波お多

○五月橋井宮隅田川お遊覧ありうしろ

おとちんおとちりおまといととと多らた遠き隅田川お

○七月の末若所僧尼神道の学をりて 尺取をり僧尼の義は神道宗

教をひらめはたをりておを起せし念又并をりて世に賞せしる視書事集海くまけて心直の

視書事集 本所の社神孫成の後林植お多らたおひりた

神植のおひりたおと老のおまはるお多らたお多らたお

わやあり本のおをりてとととをけりて世のまのりて

かのうらふ事のとらふとある事なる  
ははらり幸而と云いし初めをいふ

○因是直指院揚巻寂寂之道人著如入定以

直指院の揚巻を本食の  
聖あり念佛の暇を刻

わきこころこみ子降つ安直に因是事不唐を信ひ津東の人をいへ念仏をすむ寛文六  
年二月被察令の時明年十月廿日世にせんを知らず法人の小若く又西也いへ  
たん若あり世の中のをたを感へて發し一妻子を捨直指の身とありけり  
降ふと云て世にせんといふ今年十月十八日十念をうけ日れ六種大長と云て虎の腹  
を拂んとて剣をもちて穴小入指人念佛の言とせも小土を投げて所所小僧む又揚巻  
と十月廿日小若く念仏返返小若に十七日小若く眠るや世にせんは江戸中と云て初  
ころの友系指巻集まると事類しう  
しう以上記名不記のふを畧す

寛文八年 戊申

正月廿八日乾の方より雲の方より白氣立夜に時以消る

○二月初日東上刻牙込酒井家市下屋敷より火出尊前町法  
士町市谷田町小若く同日又市谷天龍寺寺内より火出納戸同ん  
屋敷出雲道同ん屋敷上原福徳坊武家方六番町火出五番

町二番町糺町一丁目より六丁目まで橋田屋敷屋敷出火出

あつひ小辺をさす方新橋まで海辺をさす又市菜のち上より  
火出後河邊辺津田橋鎌倉河原日本橋まで焼亡二方の火の  
一折ふあり火出町屋敷く焼失せり又同火出信谷行一里  
より火出市大名屋敷火出○二月二日日輪二ツありあつく見る

○同月二日夜少刻鏡う橋より火出市大名屋敷火出焼失坂町  
日る海へ火出く二田方町火出代官總をさす半までく焼亡  
又同日市谷車坂より火出市谷直流士町屋敷火出市谷まより市  
所へ火出二の橋町火焼亡○同月六日東上刻小日向築地火

家くより火出新橋通町火出市谷の門入此所焼く田安市門  
のち市谷又柳原屋敷火出より火出市谷通町坂田町

坂をまて焼亡 古二日の火事本武家屋敷二子百勝新町屋百  
二拾七町海寺院百廿九字百軒屋敷百七千軒とあり

○二月吉原廊内りし火事をひくた塚町依見町と号は  
依見丁ハ  
年表の  
古渡ある故く  
名つかりしを ○二月町人常力とる事を林せしむ

○二月幕末出下向れ時  
月夜も林本ありて作見し雲を雲つらの家とそ名をた  
林を井  
惟章公

○夏徳五昇 ○二月より三切先出の返く  
是と云ふ返きの  
はつとりなり 虎の返つと  
幸指出のりく妙指を極く

○形宿より半室の坂坂村下土中を穿ちて金像五寸の観世  
まらふく 高を好より背子刻して弘長二年二月とあり里人  
まらふく 嘗て安  
あんち  
ちゆふか 安の観世高きなり

○十一月十三日後八代即系率  
三王マ ○或書不寛文八年江戸小井三番の  
観世札不始りて大洲九代小男女  
歩行後おはさの  
と修られしと云 昔くおはさむむの系様又のりくは十八歳の子日  
万日の回向極とて人集はる事あり寛文中年小始りあり

寛文九年 己酉 十月 閏

二月に日流京十五堂焼亡 ○二月二日流星在ふり喜慶の如  
アツク其の  
しん ○奉公人が替り二月二日ありし今迄より二月五日と流る

○飛戸を満家社地不法性坊を初清一社を営む  
えぞ ○七月振夷人礼をふり十月まで小松前候より平あらし

○七月十八日俳人石田東将率  
八十歳又流年  
世形より并幕 ○八月十日大地震  
あふとあるといふ  
災後人作の  
久左馬守寺并たあつ

○大伴河系流原災後以  
あふとあるといふ  
災後人作の  
久左馬守寺并たあつ 災雲涼水在るなり



寛文十年 庚戌

五月十二日辰下刻より己半刻まで嵐の如く成り降り

○八月大風 ○予翁傍於不忠兵天社の御下地を築立小堂

を建内邦の書籍を収めて徳人ふとまらへて叙とう

○本朝通鑑成 二百七十一卷 撰山本善三先生編輯

同十一年 辛亥

予翁傍於不忠湖中築小築く下地一編成を建

○白金瑞雪亭完創 尾山本善作 英學館刊

○七月琉球人來 正使合武王子 同光山集瑞雪

八月廿九日南大風雨波水 徳系下台 小日向外

十二月十二日晴天震動あり

豊田所あり所降

同十二年 壬子 六月望

二月二日年込淨瑠璃坂敵討あり 同姓軍人一部を討ち遠流小ませむるはこと

○二月初をた作樂小箱成以事を止らま大佛を寄せ町中初を

男行後(刃をつ)とある

○同六月晦日大橋流等道祖大橋を改修 結派

○七月十一日持時元俊秀伝率 八十五才

此年間記事

不忠兵才天の島へ石橋を渡して是等の通流と成

○品川浄殿山へ橋草を植させしむ

○軍学志山鹿甚五左衛門 名公素行 恨人あり

○寛文中津を犯し古くは津 貞享己丑九月十六日其津を

の郎小巡せし是迄宝二年小より先一返さる 津より外延宗冬より葬を

山麻流十八郎の 世をばかされ大八車と今も利を奉ると記り

○江戸より代八車を焼く八人の男小代 此の一事本取板六本取の事麻布へり板の下より文七元結

世事治績 と名物の元結を掲げしより世の終り文七より元結

○始く元結を創 小橋の終りの名ありしより板橋子小文七よりまるる世の終り

○世時代男侍達六方組あり隠員十左衛門 文七と元結と名ありしより板橋の終り

○大の頃徳治昨未得未取加友一貞 此の頃徳治の終り

○降連筋 降連の事ありしより

○降より治り操井丹波 虎座水取近江を文徳赤土佐操

薩摩赤紙長門極不見操 紀前操等あり

○春繪残魚釣の事江戸不知人ありしより 降より小唄の事ありしより

の船政立大刃仁兵衛 声曲新纂より

○安永三年 下本

○大の頃使客の額を扱上る事 五小の宗因

ありし時深見十左衛門 五小の宗因

○寛文十一年より十二年 五小の宗因

○寛文十一年より十二年 五小の宗因

○寛文十一年より十二年 五小の宗因

○寛文十一年より十二年 五小の宗因

○寛文十一年より十二年 五小の宗因

南二月経師加多坊板とあり  
郎加を加つ事  
にまはつた

江戸年表卷之三  
南二月経師加多坊板とあり  
郎加を加つ事  
にまはつた  
江戸年表卷之三  
南二月経師加多坊板とあり  
郎加を加つ事  
にまはつた  
江戸年表卷之三  
南二月経師加多坊板とあり  
郎加を加つ事  
にまはつた

江戸年表卷之三

